滋賀大学教育学部紀要　教育科学
No.58, pp.173 － 183, 2008

進路未決定者における探索行動はなぜ少ないか
―― 大学３年次生への面接調査から ――

若　松　養　亮

Why Don't Undecided Students Explore Information?
―― Interview Research in Case of Juniors ――

Yosuke WAKAMATSU

問題と目的

大学生にとって卒業後の進路について意思決定を行うことは、人格形成にとっても、またその他の意味からの発達課題としても重要な課題である。しかもそれは、例えば小さい子の「花が好きだからお花屋さんになりたい」といった空想的なもの（Super, 1957）ではなく、現実に即した思考をもとにしたものでなければならず、しかもその実現の機会（採用試験や就職活動）までに相応の準備期間を確保できる時期に意思決定を済ませなければならない。この意思決定課題の現実性と時期の制約は得てして彼らを悩ませ、一定時期までに意思決定ができない学生の問題は「進路未決定（career indecision）」と称されて、長年にわたって研究されてきた（Gordon, 2007）。

この問題が学術的に本格的に研究されたのは、1960 年代の米国が始まりである（例えば Goodstein, 1965; Ashby, Wall, & Osipow, 1966; Baird, 1967）が、そこでは未決定者に２つのタイプがあることが指摘された。ひとつは、不安が強く、進路選択以外の領域における決定をも苦手とする indecisive 型と呼ばれるタイプで、彼らは進路が決められないゆえに卒業をも延期し、慢性的に相談所に通う人たちである。もうひとつはそうした問題はもたないが、進路意思決定に困難さを感じ、悩まされる undecided 型と呼ばれるタイプである（Tylor, 1961）。ただし、抱える問題の重篤さや意思決定までに要する期間の長さは前者がより深刻であるために、主として前者、indecisive 型に焦点を当てて、進路未決定研究は行われてきた経緯がある。

それに対して若松（2001; 2006; 2008）は、undecided 型の未決定者にもより注意を向けるべきであると主張した。それは、(1) いずれ決められるといっても、実現に向けた準備の期間を浸食するほど時期が遅い意思決定は、非現実的なものとなること、(2) 事後的にではなく indecisive 型を undecided 型と区別することは難しく、25 歳未満には区別すべきことが困難であるとする見方（Salomone, 1982）もあること、(3)undecided 型ではあっても、意思決定を難しいとする大学生は多く、その困難さを緩和・改善する支援は、開発的なキャリア教育としても意義があること、の三点からである。undecided 型は、「発達の過程でふつうに見られるもの」（Slaney, 1988）と扱われていたこともあり、なぜ決められないか、またどうすれば支援できるかの知見が不足している。しかし (3) にも述べたように、悩まされる大学生の割合から言えば、もっと究明されて良い対象である。したがって

本研究でも、indecisive 型に限らず、undecided 型を含めた未決定者を対象として、彼らがなぜ決められずにいるかの解明を試みる。

undecided 型の未決定者を研究対象とする場合、どの時点で決定していない人を未決定者とするかは重要な問題である。いかなる時点で線引きしても未決定者は存在するので、「意思決定が遅れている」と言えるだけの論拠ある線引きが必要となる。本論文では、これを大学３年次の秋・冬の時点とした。これは、（１）本研究の対象学生の多くが所属する教員養成学部において、教育実習が終了して１ヶ月が経過した時期であり、教員を最終的に志望するか否かの検討材料が入手できる時期であること、（２）企業の採用活動も始まる時期（永野 , 2004）であること、（３）都筑（2007）によれば、3 年次の 11 月時点では学生の４分の３が進路希望先を決定し、そこで決定された進路先はその後も継続して希望されることが多いこと、の三点からである。

決定・未決定の「線引き」をこのようにすることで、未決定者のなかには「決めようとしても決められない」という人だけでなく、「決めている過程にいるが遅れている」人や「決めようとしていない」人も含まれる。「決めようとしても決められない」タイプの未決定は、indecisive 型を中心として、これまでさまざまな角度から研究が蓄積されてきた。Salomone（1982）によれば、indecisive 型の未決定者が抱える問題は「情緒的・心理学的問題」を抱えており、それゆえに意思決定までにかなりの困難が予想されるという。しかしそれに対して undecided 型の未決定者が抱える問題は「合理的・認知的問題」とされ、「知識や情報を獲得させる指導・援助」（竹内・秋田 , 1994）があれば解決されるものと見なされ、それゆえに研究の蓄積も少なく、Heppner & Hendericks（1995）に認められる程度である。しかし、インターネットによって情報が容易に入手でき、またキャリア形成に関わる書籍も数多く出されているこの時代においても、進路意思決定に悩まされる学生は少なくない。例えば若松（2006）の調査では、入学時点で進路の見通しをある程度有している人が多いはずの教員養成学部においても、３年次の 11 月上旬の時点で４割強の未決定者が存在した。彼らがみな undecided 型である保証もないが、卒業延伸者の割合から考えて indecisive 型の未決定者は少数派であるので、やはり undecided 型がなぜ決められないか、どのように支援することが必要かという問題は、研究されるべき課題である。

若松（2008）は、undecided 型を中心とした未決定者について、改めてどのような困難さに彼らが悩まされているかを検討した。その結果、興味や好みといった選択を方向付けることがらに確信がもてず、また能力や実現可能性に関しても自信がなく、その結果としてどのように情報収集や意思決定を行うべきかがわからずにいるという状態像が明らかになった。しかし他方、彼らの７割もの人たちが「興味ある現実的な選択肢」を有していることも明らかとなった。これらの結果から、（１）なぜその選択肢に決めてしまわないのか、（２）能力や実現可能性は決定者たちも同程度に強く悩まされており、未決定者との違いはどこにあるのか、（３）個人差として少数であるが存在している「どの困難さにもほとんど悩まされていない人」はなぜ決めていないのか、（４）以上を総括する問いとして、彼らにとって「自身に適合した進路」とはどういうものであるか、などの課題について、さらなる究明が必要とされた。

これらの課題を究明するカギのひとつは、進路探索行動にあると考えられる。というのは、（ア）理念的・理論的に考えて、未決定者が意思決定に至るためには自己や職業についての探索行動が求められること、特に undecided 型の未決定者が抱えると言われる「合理的・認知的問題」（Salomone, 1982）の解決には情報や知識の収集・獲得が望まれること、（イ）未決定との関連は Greenhaus, Hawkins, & Brenner (1983) や若松（2007）において確認されていること、（ウ）進路意思決定課題はオープン・モデル型と言われており（宮川 , 2005）、無限にあるとされる選択肢のなかから曖昧な基準をもとに一定の満足が得られる選択肢を見出す作業を必要とするため、探索行動を前提としていること、などの理由からである。しかし若松（2007）によれば、未決定者はすべての探索行動の要素において決定者よりその頻度が低いだけでなく、なかでも「情報収集」や体験・試行などを含む「外

的活動」と呼ばれる、意思決定を推進し、満足を生む探索行動を行った経験は非常に少ない。したがって、彼らがどのような経緯で探索行動を行っていないのか、何がその障害となっているのかを解明することは、彼らの未決定を理解するとともに、支援の方策を得るために不可欠の知見となるであろう。この課題を解決するには、まず彼らの未決定をとりまく状況的な背景や、進路意思決定に関わる認知的・感情的な特質を把握する必要がある。したがって本研究では未決定者への面接調査を通して、この課題にアプローチを試みる。

方　法

1. 調査の概要と未決定者の定義

2005 年 10 月下旬～ 2006 年 1 月下旬に行った質問紙調査の末尾において、面接調査への協力を以下の文面で募った。

> **この調査に回答いただいたことようなことを中心に、進路選択について４０～５０分程度、お話を伺う面接調査を予定しています。御礼はわずかなものですが、進路について困っている方には、考えるヒントや情報源などをお教えすることもできるかもしれません。　この面接調査に協力してくださる方は、以下にお名前と連絡先をお書きください。お願いする方には後日、連絡を差し上げます。日時や場所は、協力くださる方のご都合を最大限優先させていただきます。**

この呼びかけに応じて氏名と連絡先を書いた人のうち、未決定者に連絡を取った。その時点で改めて協力を承諾し、かつ筆者の都合に合わせて面接調査（１時間前後）に応じられる人６名を対象とした。養成系学部から３名（教育学部が２名、看護系学部が１名）、非養成系学部から３名で、性別はたまたまであるが全員が女性であった。面接調査の場所は、可能な人は筆者の研究室で、それ以外の人たちについては駅で待ち合わせをして、近くの喫茶店などで面接調査を行った。調査時期は、2006 年 3 月末から 4 月初旬であった。

なお未決定者の定義については、「決定」というタームが多義的であるゆえ、慎重を期さなければならない。例えば Zener & Schnuelle（1976）による決定の定義は、考慮している選択肢があり、そのなかから第 1 志望のものを示せるか否かであった。しかし、企業を志望する学生の場合によく見られるように、ある程度の方向性を定めて、あとは就職活動のなかで絞っていくという意思決定もあり得るであろう。したがって本論文においては、若松（2001）と同様に、意思決定の役割を「実現に向けての後続する準備活動に向かわせるもの」と捉え、そうした準備活動を始められるだけの具体性と志望する欲求の強さを基準とした。具体的には、想定している現有の進路の選択肢のなかで、「この進路なら目指すと決めてもう迷わないし、具体的に詰めるつもりがない」と言えるものがあるかどうかで線引きを行った。他にまだ迷っている選択肢があるかどうかは不問とした。

2. 調査の設問

調査の目的は彼女たちの未決定をとりまく状況的な背景や、進路意思決定に関わる認知的・感情的な特質を把握することである。したがって面接で尋ねた質問は、大学・学部の特質に関わること（専攻学業の内容や卒業後の進路との関わり、さらにその学部・学科を選択して入学した経緯など）と、調査用紙への回答に対する補足や追加質問を中心に幾つかのことを半構造的に尋ねた。核になる質問は次のとおりである。

ア）所属している学部・学科の特徴とそこを選んで入学することになった経緯
イ）質問紙への回答時点から現在までの進路意思決定状況の推移
ウ）前項で挙げられた選択肢の志望理由
エ）「快適さ」（comfort; Jones, 1989）が高い（または低い）評定である理由

オ）質問紙の回答に特定の意思決定方略が見られれば、その理由
カ）「未決定の状態」設問（若松 , 2005）で特徴的な回答の理由
キ）「意思決定の困難さ」設問（若松 , 2001）で特定の（因子の）項目の評定が高い（または低い）理由
ク）「進路探索行動」設問（若松 , 2007）で頻繁に行った行動の成果（わかったことなど）
ケ）その他

3. 調査協力者の概要

面接調査に協力した人たちについて、以下に簡単に記す。なおケースを識別する記号のアルファベットはＹが養成系学部、Ｎが非養成系学部であることを意味する。

1）養成系学部

ケースＹ１：国立の教育学部のゼロ免課程（情報関係）に在学。10 月の調査時点では、選択肢を書かなかったが、それはやりたいことが多くあったもののどれも「これで」というのがなかったからとのこと。面接時点ではすでに教員一本（中学校・数学）に絞っている。質問紙への回答時点では、快適さ評定は中程度。indecisiveness（Gati, , Krausz, & Osipow, 1996）も中より少し高い程度。意思決定方略に特徴的な傾向はない。困難さに悩まされる程度（６件法）は多くの項目で４の評定が目立つ。それより高いものは評定５が３つあるのみ。探索行動はほとんどない。入学時点では教員になることは特に考えておらず、進路のことはあまり深く考えずに入ったとのこと。

ケースＹ２：国立の教育学部の教員養成課程で家庭科教育を専攻。10 月の調査時点では、「教員」の他に「研究職」、「開発」、「食品メーカー」の４つの選択肢を書いていたが、面接時点では小学校教員一本に決めて準備中。質問紙への回答時点では、快適さ評定は最低の低さ。indecisiveness の４項目への評定も比較的高い。意思決定方略は、譲歩の姿勢も多少見せるものの、自己との適合にこだわりを示す。意思決定の状態設問では、暗中模索で他の選択肢を求めている旨の回答。困難さも評定が５または６と高いものが 40 項目中 15 項目と比較的多い。探索行動は少なめ。教育学部に入ったのは教師というより教科への興味から。

ケースＹ３：私立の養護教諭を主として養成する健康福祉系学部（第１期生）に在学。１月の調査時点では、「養護教諭」の他に「美容・健康の販売員」、「医療（病院）」、「福祉施設」というように、「健康」をキーワードとした選択肢を書いていたが、面接時点では養護教諭一本に決めて準備中。質問紙への回答時点では、快適さは比較的高い方。indecisiveness も低い。意思決定方略に特徴的な傾向はない。意思決定の状態は、ほぼ進む方向が見えてきているが、なお重大な課題と考えている。困難さでは５以上の評定が１つもない。探索行動は比較的よく行っている。この学部を選んだのは、「健康を科学的に見ていく」という特徴に惹かれたからだが、創設直後の１期生ということで、カリキュラムの未整備や混乱に戸惑いを感じたという。

ケースＮ１：国立の発達心理学をメインに専攻する学部に在学。１月の質問紙調査の時点では、「消費財メーカー」、「教育」、「福祉」、「マーケティング」と企業に関わる４つの業種・職種を書いていたが、面接時点ではこれに「金融」と「生命保険」も加えて就職活動と検討をしているところとのこと。「人の生活に密着していて、役に立てそうな仕事」が選ぶキーワードとのこと。質問紙調査時点の快適さは中程度。indecisiveness は低い。意思決定方略にはこれといって特徴的な傾向はない。意思決定の状態は、そこそこ惹かれる選択肢をもちながらも、しっくりこないところもあるというところ。困難さでは５以上の評定は５項目のみでさほど悩まされてはいない。探索行動も未決定者のな

かでは行っている方。

ケースＮ２：私立の心理学を専攻する学部に在学。１月の質問紙調査の時点では、「結婚」、「警察官」、「大学院」、「企業・事務」の４つの選択肢を書いている。大学にはカウンセラーを志向して入学した。臨床心理士の資格がとれれば、小さい頃に数年お世話になっていた児童施設で働けるとの内諾があり、面接調査の時点では、それを目指して大学院に進むことに決めていた。調査用紙に回答した時点では、快適さ評定は比較的高く、indecisiveness の評定は中程度であった。意思決定方略は「自己」との結びつきをかなり強く志向している。意思決定の状態は既有の選択肢に対してしっくりこないものをまだ感じながらもまずまず満足している。探索行動は中程度。

ケースＮ３：公立の人間科学を学ぶ学科に在学。１月の質問紙調査の時点ではいずれも「営業／企画／マーケティング」を希望職種として、「食品メーカー」、「印刷業」、「住宅メーカー」、「重工業」といった業種（企業）を挙げていて、面接時点でもこれらを並行して就職活動を行っていた。質問紙回答時点の快適さ評定は中程度より少し高めであり、indecisiveness は低い。意思決定方略は「自己」との結びつきをかなり強く志向している。未決定の状態は、既有の選択肢に十分興味を引かれているが、まだ悩みでもあるといったところ。困難さはすべてが評定４以下。探索行動の頻度は高い。

結果と考察

以下には面接したケースを個別に示すことはせず、複数のケースに共通して見えてきた、彼女たちの未決定をとりまく状況的な背景や、進路意思決定に関わる認知的・感情的な特質として挙げられることを示す。

１.「自分の働いている姿が想像できること」の重要性

なぜ決まらなかったのか、そして面接時点ではなぜ決まっていたかを尋ねたときに多くの人から返ってきた回答がこの「自分の働いている姿が想像できるか」であった。そしてそれは多くの場合、企業や企業の中の特定の業種を回避させる方向にはたらいていた。

- 進路は自分にとっていっぱいあったんです。企業も銀行であったり、プログラマ系であったり、ふつうの事務職であったり、教育関係の出版であったりと、いっぱい見えていた。だけれども、どれも「これで」というのがなくて…。かといって、銀行に行ったからって何をするかというのがわかっていなかった。（Y1）
- 企業に対してと養護教諭に対して「やりたい」という気持ちを考えたときに、企業よりも養護教諭に対しての方が考えてきたことも知識も多いし、養護教諭はこれからどういう姿勢でやりたいとか理想のスタイルが明確になった。企業だと入ってからでないと明確にならない。だから面接を受けたときに「どうしてもやりたい」という気持ちを込めて言えない。（Y3）
- 「消費財メーカー」は、行った会社だけで言うと、会社の商品について説明があるだけで、どういう仕事をするかということにあまり触れてくれなかったので、印象が薄くなったという感じ。（N1）
- しっくりこなかったのは「企業・事務」。自分で企業に入って働いている姿が想像できなかった。（N2）

企業は、業種だけでもさまざまなものがあり、そこに職種が絡み、また企業の数は無数にある。企業を志望しようかと意思決定のための思考を始めた人は、まずその膨大な多様性に立ちすくむのであろう。だから、N1 が述べていたように、「企業就職となると、企業の数も半端じゃないくらい多いですし、本気で目指す気になるところを見つけることにすごいエネルギーを使っている状態。それを見つけたら本気になれると思うが、見つけるまでが大変だと感じる。」ということになる。進路選択は、自己の情報と職業情報との突き合わせや関連づけが必須だが、職業側について関連づけられるだけの情報を捉え、自分なりに位置づけたり意味づけたりする過程が、特に企業の場合、たいへんなのであろう。若松（2005; 2006; 2008）では、教育学部生の未決定、およびそれに関連する事象の如何を左右する変数として「教職を選択肢として想定しているか否か」を分析に加え、多くの変数との

関連が見出された。このことは、教育学部生にとって「教職」が専門性から見て有利にはたらき、また想定していない人が意思決定に残された時間、現実的な制約、同じ職業を目指す友人の不足などいくつかのハンデがあるため、という背景だけでなく、企業だけを想定した人との違いというのも大きかったのであろう。すなわち、教職は業種＝職種であり、生徒時代の見聞から仕事のおおよそはわかっている（という認知がある）ことに対して、企業は上述のように多様で膨大な選択肢の集合体だからである。若松（2003）は、小学生の職業認知について調査した結果から、職業内容を「わからない」とする人が多い職業ほど、それを「やってみたい」と評定する人が少ないと報告した。この傾向は小学生だけのものではなく、Deci（1975）の自己決定理論から考えれば、あらゆる年齢にあてはまると考える方が妥当である。すなわち、何をするかがイメージできない仕事を選択することは、自己決定・自律性が感じられず、動機づけが働かないのである。近年、永作・新井（2005）や Guay , Ratelle, Senecal, Lorose, & Deschenes（2006）が Deci の自己決定理論と進路選択の問題を関連づけた研究を行っているが、進路未決定の問題もそれが解明の糸口になる可能性がある。また Salomone（1982）のいう「合理的・認知的問題」のなかに、この「働いている姿が想像できる」程度の職業情報が得られていないことも大きな問題として存在する可能性がある。

2. 未決定でいても快適さが低くない背景

ケースＹ２を除いて、未決定者でありながら快適さ（Jones, 1989）は低くなかった。快適さが低いことは、未決定から決定に向けての探索行動や意思決定行動を動機づけることから、それが低くないことはできるだけ早期に意思決定を行わせるという点では望ましくないことである。該当する５名についてその経緯を尋ねると、以下のような回答があった。

- 心配はしてますけど、「なんとかなるやろ」というのがどっかにあって…。（探索行動が少ないのは他に忙しいことがあってとか、やり方がわからなくてとか、そういうことですか？）いえ…ただ単にそこまで深く考えていなかった…まだいいんちゃう？みたいな気持ちがあって。（Y1）
- たぶん「どこでもやっていけるんじゃないか」というプラス思考があって。転校経験も多くて、新しい環境に入っていくことに慣れているので、仮に就職が決まらないまま卒業をしてもなんとかなるだろう、と。（Y3）
- 大学を出ているということでどこかに就職できるだろうという気持ちで、それほど心配しているというところにはつけなかったのだろうと。（N1）
- 特に深く考えていないんですけど…どれか１本に絞ったらそれに向かって突き進むつもりができていたので。（臨床心理の大学院に）もし落ちたら…落ちた後は考えてないんですが…絶対に受からなければいけないというよりは、力試しのような感覚で。（N2）
- 就職できなかったときの身の処し方に「ライブのスタッフ」等やりたいものがあったので、そんなに焦っているわけではなかった。（N3）

ケース Y3 のようなパーソナリティや過去経験に由来するものもあるであろうが、どの人も、卒業までに進路が決まる、あるいは希望したところに行けるかどうかにあまり頓着していない印象を受ける。これは、両親が経済的に豊かであること、近年は景気が上向きで企業就職が売り手市場になってきていること（文部科学省 , 2007）などがこれまでの論調であるが、彼女たちが女性であること（次項参照）との関係も推察できる。

なおここで該当しなかったケース Y2 であるが、前章にも述べたように indecisive 傾向が高い女性であり、それゆえに快適さも低いと考えられる。

3. 女性であること、今後生きていくこととの関係

今回の対象者はすべて女性であったことと関係して、恋愛やジェンダーに関する言及が以下の通り３名から聞かれた。

- 大学の学部選択の時にも経済学部も楽しそうではあったけれど、それ関係の職業に就くのは…経済関係で働く女の人というのはばりばりやっている（できる女の人という）イメージがあって、どうなんやろと思っていて…（Y1）
- 遠距離恋愛の彼氏がいて卒業したら向こうに行くという気持ちもあって、企業であれば就職活動を向こうでしなければならなくなるし、それもあって養護教諭に絞っちゃおうということになった（Y3）
- 就職してキャリアを積んでいく自分もいいとは思うが、恋愛などで、そういうキャリア的な女性を望んでいない男性が周りに多い。つきあっている人も、自分があまりガリガリ仕事することを望んでいない…そういうことですかね。（N3）

ケース N3 は「自分のとっての価値観は“恋愛と自分”しかない。好きな人と離れることがあったらいやだな、と思った。」と述べており、恋愛を自身の人生のなかで重要視していたが、他の２名はそうではない。しかし上記のような、女性としての職業人イメージ、あるいは今後の“生き方”としての「進路」について、女性として懸念や価値観を口にする。これは、ときに意思決定を促進する方向にも作用するが、また妨害する方向にもはたらくであろう。

さらには、「職業」とは全く別の文脈のことがらが未決定に作用していたのが以下のケースである。

- 調査用紙に回答していたときは、卒業後の先の話（結婚や実家の話など）を考えてけっこうしんどい時期だった。両親の離婚、弟や姉の話など家の中でごたごたが続いていた。家族のことを考えたら、卒業後に自分だけが彼氏のいるところに行ってしまってよいか、姉がかつてかかった精神病にまたなったらどうするか、という問題で頭が痛かった。自分の卒業後の進路に悩みはないが、その他のことに悩まされていていて…進路は自分のことだけで済む話ではない。（Y3）

Super（1980）の Life Career Rainbow に示されているように、大人になるほど人は人生で果たす役割が増え、職業人以外の役割、またそれらと職業の役割の相互作用が「生き方」に反映していく。したがって職業を選択する際にも、そのような展望があって不思議はないし、またもつべきでもある。これまで進路選択研究の多くはほとんど進路選択に対する事象だけをとりあげてきたが、このような人生の設計や見通しも現実の選択には影響する。それは、個人差が大きな事象であり、またどのようなことが考慮されるかは個々人によって異なることから、マスとして行われる未決定者研究からは見えてきづらいが、忘れてはならないことである。

４. 探索行動の多寡と意思決定の方略

本研究の対象者のうち、Y1 と Y2 の２名が探索行動が少なく、N3 が多いというばらつきがある。少ない２名の説明としては、

- 「どういう仕事をするか」というイメージを掴むために、企業についてネットで調べてみようかとはならなかった。教員についても調べていなくて…全部調べていなかった。調べるって考えが自分になかったというか…。(Y1)
- （Q.「あらゆる可能性の中からベストなものを選びたい」というならもう少し何らかの探索行動をやっていてもいいような気がするが…やり方がわからなかった？　他に忙しいことがあってできなかった？）「どうしようどうしよう」と思っているだけで行動できなかった。志望している「教師」と「企業就職」のあいだで、やることが全然違うので…。(Y2)

また、ケース N2 の答から引用すると、次のようなものがある。

- （Q. 事務の仕事がイメージできないといったことで調べてみようかとは思わなかった？）そうですね。（Q . それはそれほど興味がなかったのか、調べ方がわからなかったりツテがなかったのか？）いや…調べる気がなかった。職業適性検査の結果を見て、それで満足…で終わっていた。（N2）

Y1 のケースは、職業や働くことを軽視していたというよりは、ひとつは第１項に述べたように企業という多様で膨大な選択肢のまえに立ちすくんでいたため、もうひとつは未決定者にとって「調べる」ことが億劫であることを表していると思われる。それは N2 の回答にも表れている。なかには Y2 のように、大きく異なる二方向の進路（企業は更にその中が分化しているので二方向どころではないが）を想定しているため、探索しにくい場合もあるであろうが、それにしても調べてみようとし

ない、あるいはその発想がないにもかかわらず進路を決めようとする、または決まると考えているところに、彼らの現実性の乏しさがある。

他方、そのようなことで甘んじている人ばかりではない。N3 のケースは、

- （Q. 自分では探索を積極的にやっていこうという気はあったか？）あった。自分にウリがないということは分かっていたので、積極的にテンション高めていこうと。10 月ぐらいから。（Q . それは大学の就職支援の行事か何かがきっかけで？）そう。学内の 10 月のセミナーに来た講師の人が「今から始まる」ということを強調していたので。（N3）

というように積極的に探索をしていったようである。

このような個人差が支援の手法によってだけ生まれるとは考えにくいが、いずれにせよ、未決定者たちが積極的な探索行動を行い、しかもそれが適切で効率的なものである可能性は小さいであろう。特に企業を選択肢として想定すると、選択肢が多様で膨大なだけでなく、情報量も膨大であり、また調べてもわからないことも少なくない。

そのような状態にあるにもかかわらず、意思決定の方略が非合理的であったり非現実的であったりすれば意思決定は上首尾には進まない。まず、indecisive 傾向が高い Y2 のケースであるが、

- （Q. 意思決定の方略については柔軟な部分と頑固な部分が両方見られるが？）柔軟な部分は「決めたらそれで頑張ろう」と思っているから。頑固な部分は、こだわっている部分は「理想はこうかな」という部分はある。自分は良い職業に就きたいと思うので。（Y2）
- （Q. 進路のこと以外でもなかなか決められないということは？）ある。外食などでも。すべてを見て、ベストを選ぼうと思ってしまう。進路にしても、教師と決めても、他にまだいいのがあるかもしれないと思ってしまう。（Y2）

といったようにそれらしい回答や行動が見られる。しかし indecisive 傾向が低い N3 においても、

- （Q.「自分」に合っているかどうかということにだいぶ悩まされているが？）自分のウリがないということはあるが、だからこそよけいに「このままの自分で受け入れてもらうところはないかな」と思ってしまう…甘えているというところはあるのだが…。（N3）

という発言が聞かれた。確かに、積極的に情報探索をすること、また採用側が望むように、あるいは試験に合格するように自己を変えていくことはコスト（時間、エネルギー、あるいは金銭的なもの）もストレスもかかることに違いない。

ただ、その「自分に合っている」ということを目指しはしても、必ずしも卒業直後の進路における実現は目指さないという考え方をするケースもある。

- 最終的に「やりたいことができてよかった」、「この仕事に就きたかった」と思える仕事に出会ってみたい。自分の母親も 40 代になって初めて自分がやりたい仕事に出会えた（Y3）

このように、「自分に合っている」職業は後で感じられれば良いと考えることができれば、大学生のうちから徒に選択肢を狭めることもないし、またそのように職業人として成長した後であれば自分に合っていると感じることも相対的に容易であろう。ただ、こうした将来展望を持ったうえでの意思決定は、やりなさいと言われても実行は困難である。

全体的考察

大学生にとって卒業後の進路選択は、長期に渡る時間の過ごし方や生き方を左右するだけでなく、社会のなかで自分が働くこと・生きていくことの意味を自己実現的に考える（尾高 , 1941; 下村 , 2005）ために、意思決定に困難さを感じ、なかなか決められないという状態像は、むしろ自然な姿であると言える。それだけに、「自分の働いている姿が想像できること」が重要なのであろう。すなわちどのような仕事に従事し、どのような苦労があり、またやりがいが感じられ、年数を減るにつれてどのように役割や責任が変化していくかといったことは、身近にその職業に就いている人がいて話

が聞けたり、あるいは就職活動で実際の就業者に直接コンタクトがとれないうちは、なかなかわかりづらいであろう。進路先として企業を考える場合は、業種・職種の多様さに加えて複数の企業があるために、その傾向がいっそう強いと考えられる。しかしこの傾向は、Deci（1975）の自己決定理論から考えれば、十分に理解できる。すなわち、「働いている姿」が思い描けて初めて、その仕事をやってみたいかどうかの判断が可能になり、進路先として目指すための動機づけが高まるからである。

しかし、彼女たちは３年次の秋・冬の時期になっても未決定でいながら、快適さ（comfort）が低くなく、また探索行動も行っていない人の方が多かった。それは女性であることによるジェンダー・バイアス（本田 , 2002）もあるであろうが、それよりも「なんとかなるのではないか」というさしたる根拠がないように思われる感覚や、「調べる気がなかった」という危機意識に欠けた感覚、膨大な、あるいは漠然とした選択肢を前にしての「手が付けられない」という状態が、そのような消極的な進路決定についての発言に見てとれる。このうち「なんとかなる」や「調べる気がない」という感覚は、現実の進路選択過程を理念的に考えると、全く合っていないスタンスであると言わざるを得ない。確かに近年、偶発的な出会いや機会を積極的に迎え入れ、活用していこうというあり方から、合理的に考えすぎる進路選択過程も批判されている（Gellat, 1989; Mitchell, Levin, & Krumboltz, 1999; 下村・菰田 , 2007）が、彼女たちのそのスタンスは、こうしたポジティブな態度とは異なるものである。undecided 型は「合理的・認知的な問題」のために決められないとされる（Salomone, 1982）が、それは単に情報や知識が足りないためというよりは、必要な情報に手を伸ばし、積極的に調べ、考えていこうとするあり方がまず不足しているためではないか。彼らのこうした気の進まなさ（reluctancy）はもちろん、不真面目さによるものとは必ずしも言えない。日々の忙しさや進路以外の問題に悩まされていることの影響や、進路という人生の一大事を決めることへの気後れも要因として考えられる。また前述したように、選択肢があまりに多く、あるいは漠然としていることから、どこから手をつけて良いか、あるいはどのように情報収集・探索を進めていくことで、自分が納得した意思決定に至るのかといった課題が、オープン・モデルと言われる最適解がない問題解決状況として立ちはだかっていることも関係しているであろう。インターネットでいながらにしてさまざまな情報が入手できると言われる近年においても、情報の多さが逆にネックになり、あるいはそのなかからどのように意思決定まで思考や選択を収束させていくかは難しく、その見通しがもてないゆえに、そうした reluctancy 傾向が助長されるのではないだろうか。彼らの有する問題は、自己や職業の知識・情報を与えれば解決できるというものではなく、それらに手を伸ばさないこと、また選択・決定までにどのように知識・情報・思考を収束させていくかがわかりにくいことにある。あるいは、indecisive 型の未決定者の特質とされる「感情的・心理学的問題」を undecided 型も有していないかどうかも、検討されなければならない。すなわち、職業忌避的な傾向をもたらす葛藤や不安などである。

未決定者の多く、あるいは undecided 型がこのような reluctancy 傾向を有しているとすれば、彼らに対しては指示的な情報探索と意思決定のペースメイキングが必要になると考えられる。例えば Super（1957）は職業相談のカウンセリングにおいて、来談者の現実吟味を助ける目的から、課題の設定や事実・情報の探索作業については指示的な方法をとるのがよい、としている。来談しない進路未決定者は、自分のペースと方法で進路を考えようとするが、高校や大学の選択とは異なり、学力や偏差値という一元的かつ現実的な判断基準が存在しない大学卒業後の進路については、非現実的な意思決定になりやすいのであろう。

進路未決定研究はこれまで、どのような問題でつまずいているかという記述的な観点から解明したものと、「決められないこと」の背景あるいはメカニズムを主としてパーソナリティなどで解明したものがあった（若松 , 2008）。後者は「決めようとしても決められない人」、すなわち主として indecisive 型を念頭においているために、一般学生に見られる進路未決定の一部を説明するものであるが、前者においても、例えば Gati et al.（1996）や若松（2008）に見られる「困難さ」という切り口では、undecided 型を含めた一般学生の未決定のメカニズム（なぜ決められないのか、どうすれ

ば決めさせられるか）は、見えてきにくいものかもしれない。すなわち、彼らが抱える困難さの内容が問題というよりは、それらを解決するために必要となる、探索行動を始めとする意思決定行動に彼らが現実的に関わってこない、あるいはこられないことがまず障害になっているからである。とすれば、今後の進路未決定研究は、どのような進路探索の環境を与え、あるいはどのように彼らの進路選択行動を支援することが、意思決定に至らせるのかという実践的な課題の解明が待たれることになるであろう。

本研究は、限られた面接調査での結果から、進路未決定の背景を解明してきた。ただし調査対象者が全員女性であったこと、回想によるものであったことなど、いくつかの制約がある分析となった。しかし、支援についての一定の示唆が得られるなど、今後の研究に貢献する知見を提示できたことは成果であると言える。

引用文献

Ashby, J. D. , Wall, H. W. , & Osipow, S. H. (1964). Vocational uncertainty and indecision in college freshmen. *Personnel and Guidance Journal*, **44,** 1037-1041.

Baird, L. L. (1969). The undecided student- How different is he? *Personnel and Guidance Journal*, **47**, 429-434.

Deci, E. L. (1975). *Intrinsic Motivation*. New York: Plenum.

Gati, I., Krausz, M., & Osipow, S. H. (1996). A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 510-526.

Gelatt, H. B. (1989). Positive uncertainty: A new decision-making framework for counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 252-256.

Goodstein, L. D. (1965). Behavior theoretical views of counseling. In B. Steffire (Ed.), *Theories of counseling*. New York: MaGraw-Hill.

Gordon, V. N. (2007). *The undecided college student: An academic and career advising challenge*. 3rd Ed. Ill: Springfield.

Greenhaus, J. H., Hawkins, B. L., & Brenner, O. C. (1983). The impact of career exploration on the career decision-making process. *Journal of College Student Personnel*, **24**, 495-502.

Guay, F., Ratelle, C. F., Senecal, C., Lorose, S., & Deschenes, A. (2006). Distinguishing developmental from chronic career indecision: Self-efficacy, autonomy, and social support. *Journal of Career Assessment*, **14**, 235-251.

Heppner, M. J. & Hendricks, F. (1995). A process and outcome study examining career indecision and indecisiveness. *Journal of Counseling & Development*, **73**, 426-437.

本田由紀 (2002). ジェンダーという観点から見たフリーター 自由の代償フリーター 労働政策研究・研修機構

Jones, L. K. (1989). Measuring a three-dimensional constuct of career indecision among college students: A revision of the Vocational Decision Scale － The Career Decision Profile. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 477-486.

宮川公男 (2005). 意思決定論―基礎とアプローチ 中央経済社

Mitchell, K. E., Levin, A., & Krumboltz, J. D. (1999). Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities. *Journal of Counseling and Development*, **77**, 115-125.

文部科学省 (2007). 学校基本調査（高等教育機関）http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08010901/002/002/001.htm

永野 仁 (2004). 大学生の就職と採用 中央経済社

永作稔・新井邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究 , **53**, 516-528.

下村英雄 (2005). 大学生の就職意識－大学生という「子ども」の意識 IDE －現代の高等教育 , 2005 年 2 月号 , 23-28.

下村英雄・菰田孝行 (2007). キャリア心理学における偶発理論－運が人生に与える影響をどのように考えるか－ 心理学評論 , **50**, 384-401.

尾高邦雄 (1941). 職業社会学 岩波書店

Super, D. E. (1957). *The psychology of careers*. New York: Harper & Row.

Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **16**, 282-298.

竹内登規夫・秋田葉子 (1994). Indecisiveness 尺度の作成のための予備調査 愛知教育大学研究報告（教育科学編）,

43, 145-157.
都筑　学　(2007). 大学生の進路選択と時間的展望　ナカニシヤ出版
Tylor, L. E. (1961). Research explorations in the realm of choice. *Journal of Counseling Psychology*, **8**, 195-201.
若松養亮　(2001).　大学生の進路未決定者が抱える困難さについて－教員養成学部の学生を対象に－　教育心理学研究 **49**, 209-218.
若松養亮　(2003).　小学生の職業認知の指標間の関連　小学生の職業意識とキャリアガイダンス（日本労働研究機構資料シリーズ 138）, pp.121-135.
若松養亮　(2005).　教員養成学部生における進路意思決定の遅延－３回生 11 月時点で未決定の学生を対象に－　滋賀大学教育学部紀要（教育科学） 54, 77-86
若松養亮　(2006).　教員養成学部の進路未決定者が有する困難さの特質－類型化と教職志望による差異の分析を通して－　青年心理学研究 , **17**, 43-56.
若松養亮　(2007).　教員養成学部生における進路探索行動と意思決定の関連－ 11 月時点の３年次生を対象に－　滋賀大学教育学部紀要（教育科学） 56, 139-149.
若松養亮　(2008).　大学生の職業・進路未決定の教育心理学的研究　東北大学博士学位論文